

性役割に対する意識がソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に及ぼす影響

山下 倫実⁽¹⁾・坂田 桐子⁽²⁾

【要約】

これまで女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼るという結果 (Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999) が数多く報告されている。また、婚姻関係より社会的制約が少ないと考えられる恋愛関係においても、男性は他の関係より恋愛パートナーから提供される情緒的サポート量が最も高いのに対し、女性は恋愛パートナーと同性友人の情緒的サポート量が同程度に高いという結果が得られている (山下・坂田, 2008)。本研究では、このような結果の背景に個人の性差観が影響している可能性について述べ、大学生165名を対象に個人が持つ性差観とソーシャル・サポートの受容との関連について検討を行なった。その結果、性差観の強い男性は、性差観の強い女性より異性からの情緒的サポートが多く、性差観の弱い男性は性差観の強い男性より、同性の情緒的サポート源が多いという結果が得られた。また、性別に関わらず、性差観の強い者は他の関係より恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受けていた。このような結果をふまえ、性差観が「男性は強く、自立的であり、女性は弱く、依存的である」という意識を活性化させることによって、ソーシャル・サポートの授受にジェンダー差を生じさせる可能性について議論された。

キーワード：ソーシャル・サポート、性差観、恋愛関係、大学生

(1) 流通経済大学教育学習支援センター

(2) 広島大学大学院総合科学研究科

【問題】

ソーシャル・サポートとは、ある個人を取り巻く様々な人からの有形・無形の資源の提供（南・稲葉・浦，1988）と定義されている。このようなソーシャル・サポートの種類について、研究者によって様々な分類がなされてきたが、概ね2種類に大別されることが明らかとなっている。具体的には、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する情緒的サポートと、個人が直面している問題そのものを直接的・間接的に解決するための機能を提供する道具的サポートである（橋本，2005）。多くの先行研究によって、これらのソーシャル・サポートが抑うつ状態の緩和、心理的満足感、死亡率の低減など個人の心身の健康と関連することが示唆されてきた（e.g., Cohen & Wills, 1985; Blazer, 1982; Seeman & Syme, 1987; 和田, 1992）。では、なぜソーシャル・サポートが心身の健康にポジティブな影響を及ぼすのであろうか。

この過程について、先行研究ではソーシャル・サポートとストレスとの関連から検討がなされてきた。Lazarus & Folkman（1984）によると、ストレスの原因となりうる生活上の出来事が生じた場合、その出来事が自分にとってどの程度有害であるかという評価（1次的評価）と有害であると評価された出来事にどのように対処できるかという評価（2次的評価）がなされ、自分のもつ対処資源が不足する場合や対処方略が機能しない場合にストレスを感じるという心理的ストレス理論を提唱した。これらの理論に基づき、Cohen & Wills（1985）は、ストレスの原因となる出来事が心身の健康に悪影響を及ぼすプロセスにおいて、ソーシャル・サポートが①ある出来事がどの程度有害であるかという評価する段階、②ストレスフルであると認知された出来事が心身の健康に悪影響を及ぼす段階という2つの段階で緩衝的な効果を持つことを示唆している。

特に、ソーシャル・サポートを受けることができる人数（ソーシャル・サポート・ネットワーク）やソーシャル・サポートを受けることができる関係の種類（ソーシャル・サポート源）など、ソーシャル・サポートの構造的側面に着目した研究においては、多くの対人関係を維持しているほうが適応的であることを示している（e.g., Berkman & Syme, 1979; House, Landis, Umberson, 1988; Cohen, 1988; Ross, Mirowsky, & Goldsteen, 1990）。その理由として、ソーシャル・ネットワークが広い（すなわち、対人関係の数が多い）ほど、ソーシャル・サポートの利用可能性や実行頻度なども高いことが示されており（Vaux & Harrison, 1985）、多くのソーシャル・サポート源を持つことが、必要な場合に十分な量のソーシャル・サポートを受容できることにつながるためであると考えられる。また、ソーシャル・ネットワークの広さとソーシャル・サポート源の多様さとの間に正の相関が認められる傾向にあり（福岡・橋本，1997，福岡，2001）、対人関係が多様であることは、様々な興味や関心、新しい価値観や考え、自分とは異なる物事への対処行動などに触れる機会を得ることにつながると考えられる。つ

まり、ソーシャル・サポート源が少ない者と比較して、ソーシャル・サポート源が多様な者は様々なストレス状況に適したソーシャル・サポートを選択できる可能性がある。このような知見をふまえるならば、1人の人物から受容するソーシャル・サポートは個人の心身の健康を保つために重要な役割を果たすが、一方で様々なストレス状況に対応するためにソーシャル・サポート源の多様性が必要不可欠であると考えられる。

しかし、このようなソーシャル・サポートの機能的側面や構造的側面にはジェンダー差が認められることが報告されている。例えば、女性は男性より多様なサポート源を有すること (e.g., Leavy, 1983; 嶋, 1991, 1992; 和田, 1992, 1998), 高齢者においては、女性は多様な関係からソーシャル・サポートを受けるが、男性は配偶者からのソーシャル・サポートに頼ること (Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999), 男性にとって男性にソーシャル・サポートを求めるより女性に求める方が抵抗感が少ないこと (Nadler, Maler, & Friedman, 1984) が示されている。このような先行研究をふまえるならば、婚姻関係ほどには社会的制約のない恋愛関係においても、女性は恋愛パートナーを含め多様な関係からソーシャル・サポートを受けるのに対し、男性はより親密な異性である恋愛パートナーからのソーシャル・サポートに依存しがちであると予測される。特に、このような傾向は情緒的サポートにおいて顕著である可能性が高い。このような可能性について、山下・坂田 (2008) は、ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性にジェンダー差が認められるか検討し、男性は情緒的サポートを他の関係より恋愛関係から得ているのに対し、女性は恋愛関係と同性友人の両方から得ているという結果を明らかにした。山下・坂田 (2008) の結果は、先行研究と一貫した頑健な結果であると考えられるが、男性もしくは女性であるという生物学的な要因のみにソーシャル・サポート源の選択が規定されるとは考えにくい。むしろ、このようなプロセスにはある程度の個人差が存在すると考えられる。そこで、本研究では、ソーシャル・サポート源の選択に個人差を生じさせる要因として性役割に対する意識に着目し、ソーシャル・サポート受容との関連を検討する。本研究において扱うソーシャル・サポートの種類については、①ソーシャル・サポートを異性に頼りやすいというジェンダー差は、特に情緒的サポートで認められやすいこと (e.g., Antonucci & Akiyama, 1987; 和田, 1992; Hays & Oxley, 1986), ②山下・坂田 (2008) より、恋愛中のソーシャル・サポート源の選択に関するジェンダー差は情緒的サポートでのみ認められたことをふまえ、情緒的サポートに着目する。

性役割とは、ある文化や社会において男性と女性にそれぞれふさわしいと期待されている行動特性やパーソナリティ特性に関する期待や規範を指す (鈴木, 1996)。これまで心理学においては、男女に期待される性役割に関して、男性性・女性性など性格特性を扱う性役割認知・性役割観に関する研究や、“男は仕事、女は家庭”などの性役割分業に対する態度を扱う性役割態度などの研究が行われてきた (伊藤, 1997)。性役割に関

する概念は実に様々なレベルや側面から捉えられている。主な概念について以下に述べる。

まず、前者の研究においては、自己の性別についての基本的確信や自分自身の男らしさ・女らしさに対する自己認知や自己評価である性役割同一性 (sex role identity) を含むジェンダー・アイデンティティ (gender identity), 及び性別化された自己概念である性役割パーソナリティなど、性役割認知に関する概念が検討されてきた。また、性に基づく社会からの役割期待の認知, および性役割に関する自己の価値観である性役割観についても検討が行なわれている。一方、後者の研究においては、性役割に対して、一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である性役割態度 (東・鈴木, 1991) について検討されている。さらに、人が様々な行動様式, 人格特性, 態度, 意識などを性別化して捉えるための枠組みに関する研究も存在する。Bem (1981) は、多くの刺激情報の中から特に性と結びついた情報に注意を向け、記憶し、構造化するための1つの情報処理をジェンダー・スキーマと呼び、性に関するあらゆる情報がこのジェンダー・スキーマによって処理されると考えた。このジェンダー・スキーマの1つのあらわれとして、伊藤 (1997) は性差観という概念を提唱している。性差観とは、人が自分を取り巻く環境を認知する際に使用する性 (ジェンダー) に関する認知的枠組みのことである。

このように様々なジェンダーに関する概念が提唱されており、特に性役割パーソナリティとソーシャル・サポートの授受との関連が、理論的にも実証的にも多くの先行研究によって指摘されてきた。橋本 (2005) の理論的示唆によると、気遣いや情緒の表出性を強調する女性役割はサポート授受を促進するので、女性や女性性の高い人は、ストレス直面時にサポートを得やすくなる。一方、達成や自律性, 情緒の統制を強調する男性役割は、男性のサポート希求や入手を困難にするという。また実証的な研究においても、Burda, Vaux, & Schill (1984) は、大学生を対象に調査を行っており、男性性と女性性を共に内在化している両性具有型 (Androgynous) 及び伝統的女性型 (Feminine) が、伝統的男性型 (Masculine) 及び未分化 (Undifferentiated) より対人関係全体からの情緒的サポートや家族からのサポートを高く評価するという結果を示している。また、Butler, Giordano, & Neren (1985) は、女性性とソーシャル・サポート希求やソーシャル・サポート知覚との間には正の関連があり、特に、ソーシャル・サポート希求との関連のほうが強いかを示唆している。これらの結果より、女性性はソーシャル・サポートの希求や受容と関連があるが、男性性とは関連があまり認められないと考えられる。

ジェンダーが社会的な性である以上、どちらの役割を内在化しているかは性別とあまり関連しないはずであるが、女性には女性役割が、男性には男性役割が社会的に期待されるため、自分の性別に沿った役割を内在化しやすいと考えられる。性役割の影響をふまえると、男性は期待されたジェンダー役割に違反し、他者から嘲りを受けることを

恐れており、女性と比較して他者からの援助を期待しないと考えられる。そのため、男性のソーシャル・サポート源及びその心身に及ぼすポジティブな効果は、女性と比較して限定的となる (e.g., Antonucci & Akiyama, 1987; 嶋, 1992; 尾見, 1999, 福岡・橋本, 1997)。以上の先行研究をふまえるならば、個人が性役割をどの程度内在化しているか、性役割をどの程度重要であると評価しているかといった性役割に対する意識がソーシャル・サポートの授受に与える影響は大きいと考えられる。それでは、ソーシャル・サポート授受と最も強く関連する性役割の側面は何であろうか。

ソーシャル・サポートの授受を行なう際、自分自身がソーシャル・サポートをどの程度期待するか、ソーシャル・サポートの授受をどの程度行うべきであるかといった個人のパーソナリティや個人的信念に関わる判断ばかりがなされるわけではないだろう。むしろ、ソーシャル・サポートの授受の際には、誰が問題解決のためのソーシャル・サポートを提供することが可能か、誰からソーシャル・サポートを受容すべきかといった他者に対する態度や信念に関わる判断がなされると考える。したがって、ソーシャル・サポートの授受と性役割パーソナリティとの関連を検討するだけでは不十分であると考え。また、先行研究においては、性役割パーソナリティと実際の性役割行動 (Orlofsky & O'Heron, 1987) や性役割観 (Spence & Helmreich, 1978) との関連が薄いことが指摘されている。実際、先述したButler et al. (1985) で得られた結果についても、女性性とソーシャル・サポート希求との関連 ($r=.37$) 及びソーシャル・サポート知覚との関連 ($r=.19$) の両方において、その関連は中～弱程度であり、それほど強くない。以上より、ソーシャル・サポート授受について検討する場合、性役割パーソナリティではなく、性役割行動や性役割態度などに着目する必要があると考える。特に、伊藤 (1997) は性差観 (ジェンダー・スキーマ) が性役割態度を規定し、その態度に基づいて性役割の選択が行なわれることを明らかにしており、性差観を測定することが性役割態度や性役割に基づく行動の予測には有効であることを示唆している。本研究で検討するソーシャル・サポートの受容も性役割に基づく行動の1つであると考えられるため、性差観との関連を検討することは有意義であると考え。したがって、本研究では、恋愛パートナーにソーシャル・サポートを求める程度に影響を与える要因として、性差観に着目する。

ただし、伊藤 (1997) の性差観尺度については、否定的な印象を与える測定項目が認められ (i.g., 女性は視野がせまい, 女が人前でタバコを吸うのは好ましくない), 調査協力者の回答傾向に影響を与えることが予想される。そこで、本研究では、伊藤 (1998) によって性差観と関連が強いことが見出されている性差意識尺度を基にした尺度を用いて検討を行なう。性差意識尺度は、身体領域 (スピード, 持久力, 筋力, 敏捷性・瞬発力, 身体・生理), 内的領域 (勉強・学力, 性格, ものの考え方・価値観) の2因子からなるが、特に、内的領域に関する性差意識と性差観との関連が強いことが明

らかとなっており、非常に類似した概念を測定することが可能である。そこで、本研究では内的領域に関する性差意識を性差観（ジェンダー・スキーマ）として用いる。

最後に、本研究の予測について述べる。前提として、個人の性差観の強さは、自分と相手の性別の違いに着目し、様々な情報を性別の違いによって処理しようと動機づけられる傾向に影響すると考える。これまでの先行研究において、性差観の強い者は、①生育段階において早い段階から、内的領域に関する性差意識が高く、社会的地位や職業における男女間の差異を能力によるものだと考えること、②自分とは異なる性として異性の存在を強く意識し、異性への関心も異性からみた自己への関心も高いことが示唆されている（伊藤, 1998）。おそらく性差観の強いものは、「男は仕事、女は家庭」といった役割を果たすため、男性には肉体的・精神的に強く、独立心が強く、感情を表さないといった「男性性」が、女性には従順で、依頼心が強く、気配りができるといった「女性性」が求められることを強く意識していると考えられる。したがって、性差観の弱い男性に比べて、性差観の強い男性は、男性は強く自立的であるべきで、他者からサポートを受けるべきでないという考えに基づき、情緒的サポート源をあまり持たないと予測する。一方、性差観の弱い女性に比べて、性差観の強い女性は、女性は従順で依頼心が強いことを許されているという考えに基づき、多くの情緒的サポート源を持っていると予測する。

それでは、実際のサポート受容についてはどのように考えられるだろうか。まず、恋愛関係という関係が情緒的サポートの受容に与える影響を考慮すると、人には恋愛・配偶者関係にあるパートナーが他の関係から情緒的資源（気遣いや配慮）を得ることを防衛する感情が備わっているという知見が得られており（Buunk & Hupka, 1987）、恋愛関係における情緒的サポートの交換は望ましいという規範が存在することが推測される。そのため、性別に関わらず、恋愛関係が維持されている間は、情緒的サポートを恋愛パートナーから得やすいと予測される。さらに、恋愛関係においては、性役割の内化の程度に関わらず、性役割に沿った行動をとりやすいことが示唆されており（土肥, 1996）、性差観の強い者はより性役割規範に対する関心が高いため、性役割に沿った行動をとりやすくなると推測される。したがって、性差観の強い女性は、女性は依頼心が強いという性役割規範を恋愛パートナーに示すため、情緒的サポートを他の関係より恋愛パートナーから得ると予測する。一方、Nadler et al. (1984) は、男性は、サポート提供者が男性である場合より女性である場合の方がサポートを求めやすく、サポートの受容についてポジティブな反応を示すという結果を示している。このような結果が得られた理由として、女性は他者に対して親切にするべきであり、他者の世話をすべきであるという性役割が存在し、このような性役割にサポート行動が反しないためであると考察されている。特に、①恋愛関係は性役割に従って行動しようと強く動機づけられる状況であること（土肥, 1995）、②結婚後、男性は配偶者のサポートのみを高く評価す

ること (Antonucci & Akiyama, 1987; Vaux, 1985) などの結果をふまえるならば、恋愛関係という状況においてこれらの傾向は強くなると考えられる。性差観の強い男性は、他者をサポートするべきであるという女性役割を強く意識するため、基本的には、同性より異性に情緒的サポートを求めようとするだろう。しかし、男性は強く自立的であるべきだという規範を強く意識しているため、多くの異性から情緒的サポートを受容するというより、特に、親密な恋愛パートナーに多くの情緒的サポートを依存すると予測される。これらの予測を以下に整理する。

予測

1. 性差観の強い男性は、性差観の強い女性、性差観の弱い男性および女性と比較して、情緒的サポート源が少ない (特に、同性の情緒的サポート源)
2. 恋愛関係にある者は、性別に関わらず、性差観の強い者は性差観の弱い者と比較して、恋愛パートナーに情緒的サポートの多くを依存する

【方法】

調査協力者 質問紙の回答者は174名であった (男性92名, 女性82名)。回収率は78.7%であった。「恋人」という関係からの情緒的サポートについて回答していた、現在恋人のいる大学生は68名 (男性24名, 女性44名) であった。平均年齢は20.31歳 ($SD=0.91$, レンジ19-24) であった。

手続き 講義時間に質問紙を配布し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。ソーシャル・サポート尺度への回答方法が難しかったため、その部分については回答方法を説明しながら、講義室内で回答してもらった。残りの質問項目についてはプライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出するよう教示した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。

1) 各対人関係から受容している情緒的サポートの測定

人間関係について「会う回数とは関係なく、あなたが身近に感じる人との関係」と定義し、例として、家族、友人、恋人、先輩/後輩などを挙げた。なお、該当する人物がない場合、無理に挙げなくてもよいことについても表記した。

① 対人関係からの情緒的サポートの受容

「あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか」という質問項目にあてはまる人物のイニシャルをできるだけたくさん挙げてもらった（最高10人まで）。次に、性別及び関係（友人/家族/恋人など）について回答を求めた。最後に、その人々から受けているサポート量の全てを100%とすると、各人物から受容している情緒的サポートはどの程度か、おおよその割合を割り当ててもらった。

なお、情緒的サポート人数とは、調査協力者が情緒的サポート提供者として挙げた人物の数である。次に、恋人からの情緒的サポート率とは、情緒的サポート提供者として挙げた人物全員から受けているサポートを100%として、恋人から受けているサポートのパーセンテージを指標化したものである。

② 情緒的サポート満足度

「現在、あなたはこのようなサポートを、どの程度十分に受けられていますか?」という1項目について7件法で尋ねた。

2) 性差意識尺度

伊藤（1998）を参考に、「持久力（長くもちこたえる力）」、「筋力」,「敏捷性（動作のすばやさ）・瞬発力」,「身体・生理」,「行動力」,「勉強・学力」,「対人関係」,「性格」,「表現力（感情や精神など内面的なものを目に見える形で表す力）」,「感情」,「ものの考え方・価値観（ものを評価する基準）」の11項目からなる尺度を用いた。伊藤（1998）と異なる点は、「敏捷性・瞬発力」と類似していたため、「スピード」を除外し,「行動力」,「対人関係」,「表現力」,「感情」の4つを加えたことである。これらの項目について、男女の差異を意識する程度を、全く意識しない（1点）～非常に意識する（6点）までの6件法で回答するよう求めた。

【結果】

予測1については、回答不備者8名を除いた165名（男性86名、女性79名）を対象に分析を実施し、予測2については、情緒的サポート提供者として恋人を挙げていた、現在恋人のいる68名（男性24名、女性44名）について分析を実施した。

1) 性差意識尺度の因子分析

まず、性差意識尺度の計11項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰、因子の解釈のしやすさなどを考慮し、2因子を抽出した。累積

寄与率は43.41%であった。パターン行列を示す (Table 1)。第1因子は「表現力」, 「感情」, 「性格」などの項目に高く負荷しているため, 内面的性差意識因子と名づけた。追加した項目以外は, 伊藤 (1997) の内的領域に関する性差意識とほぼ同様である。第2因子は「筋力」, 「身体・生理」などの項目に高く負荷しているため, 外面的性差意識因子と名づけた。伊藤 (1997) の身体的領域に関する性差意識とほぼ同様である。また, 下位尺度の信頼性については, 内面的性差意識では $\alpha = .85$ であったのに対し, 外面的性差意識因子は $\alpha = .62$ であった。以下の分析では, 各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として使用した。

Table 1 性差意識の因子分析結果と因子間相関

	内面的性差意識	外面的性差意識
9 表現力	.87	.05
10 感情	.79	.08
8 性格	.78	-.02
7 対人関係	.67	-.06
11 ものの考え方・価値観	.55	.06
5 行動力	.48	.04
6 勉強・学力	.47	-.05
2 筋力	-.11	1.00
4 身体・生理	-.02	.48
3 敏捷性(動作のすばやさ)・瞬発力	.14	.43
1 持久力(長くもちこたえる力)	.15	.30
寄与率(%)	13.76	29.64
累積寄与率(%)	13.76	43.41
信頼性(α)	.85	.62
因子間相関	内面的性差意識	.08

2) 性差意識尺度に関する予備的分析

予測の検討を行なう前に, 性差意識尺度の平均値について示す。まず, データ全体 (165名) の平均値は, 内面的性差意識3.46 (男性3.73, 女性3.17), 外面的性差意識4.17 (男性4.01, 女性4.33) であり, 外面的性差意識の方が高かった。次に, 恋愛関係にある者 (68名) の平均値は, 内面的性差意識3.25 (男性3.35, 女性3.18), 外面的性差意識4.21 (男性3.98, 女性4.34) であり, 恋愛関係にある者についても外面的性差意識の方が高かった。

本研究においてジェンダー・スキーマの指標として用いる内面的性差意識について, 2 (性別: 参加者間) \times 2 (恋人の有無) の分散分析を実施したところ, 交互作用が有意傾向であった ($F(1,161) = 3.44, p < .10$)。下位検定の結果, 女性については恋人有群 ($M = 3.18$), 無群 ($M = 3.15$) の差はなかったが, 男性の恋人有群 ($M = 3.35$) と無群

($M=3.87$) との間に差が認められた。そこで、内面的性差意識の高低群の分類については、「女性(恋人有無群) $M=3.17$ 」, 「男性恋人有群 $M=3.35$ 」 「男性恋人無群 $M=3.87$ 」の各群の平均値を基準とし、高低群に分類した。

3) 内面的性差意識と情緒的サポート人数との関連

予測1について検討を行なう前に、従属変数となる指標について説明する。まず、情緒的サポート人数を算出した。この指標は、情緒的サポート提供者としてイニシャルが挙がった人数をカウントしたものである。また、Nadler et al. (1984) によると、男性は、サポート提供者が男性である場合より女性である場合の方がサポートを求めやすく、サポートの受容についてポジティブな反応を示すことが示唆されており、内面的性差意識が、同性の情緒的サポート提供者の人数や異性の情緒的サポート提供者の人数と関連することが考えられる。そこで、情緒的サポートにおける同性の友人・その他の数と情緒的サポートにおける異性の友人・その他の数を算出した。この指標は、情緒的サポート提供者としてイニシャルが挙がった人物のうち、友人とその他関係として挙がった人物をカウントした指標である。家族からの情緒的サポートを除外した理由は、家族からのサポートの機能にジェンダー差が存在する可能性があり、他の関係と異なる性質を持っていると判断したためである。実際、大学生にとって家族からのサポートは女性においては心理的健康に影響するが、男性においては心理的健康に影響しないというジェンダー差が認められるという知見が得られている(橋本・福岡, 1997)。

情緒的サポート人数を従属変数とし、2(性別) × 2(内面的性差意識: 高/低)の参加者間の2要因分散分析を行なったが、いずれの主効果、交互作用効果も認められなかった($F(1,161) = 1.28, p = .26$)。次に、2(性別) × 2(内面的性差意識: 高/低) × 2(情緒的サポート人数: 同性友人・その他/異性友人・その他)の混合デザインによる3要因分散分析を実施した。その結果、性別 × 内面的性差意識 × 情緒的サポート人数の3要因の交互作用が有意傾向にあった($F(1,161) = 3.76, p < .10$; Figure 1)。下位検定の結果、性別や内面的性差意識に関わらず、同性友人・その他の人数が異性友人・その他の人数より多かったが($p < .01$)、性差観の高い男性($M = .88$)が性差観の高い女性($M = .38$)より異性友人・その他の人数が多かった($p < .05$)。また、性差観の低い男性($M = 3.83$)が性差観の高い男性($M = 3.03$)より同性友人・その他の人数が多い傾向にあった($p < .10$)。したがって、情緒的サポート提供者の人数には予測したような違いは認められなかったが、性差観の強い男性は性役割規範意識が強いいため、基本的に同性より異性の情緒的サポート源が多くなり、性差観の低い男性はそのようなこだわりが弱いいため、同性からの情緒的サポートが多いといった傾向は概ね認められる傾向にあり、予測1を支持する方向の結果が得られた。

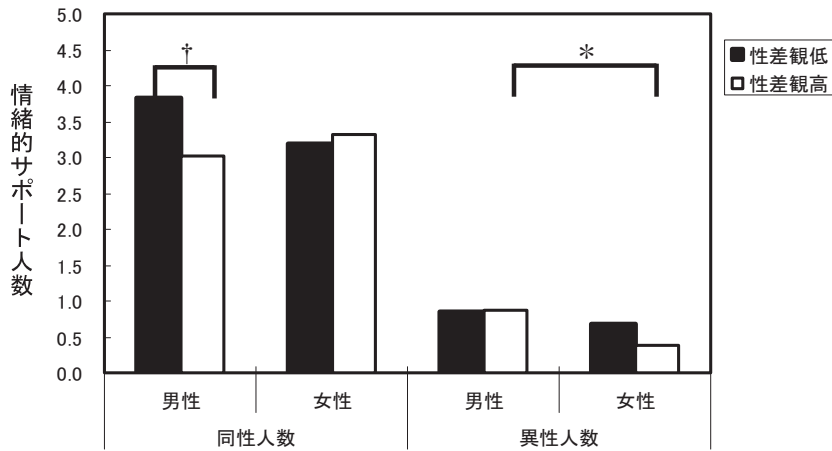


Figure 1 内面的性差意識×性別×情緒的サポート人数の交互作用 ($F(1,161) = 3.76, p = .10$) † $p < .10$ * $p < .05$

4) 性差意識と恋人から提供されている情緒的サポートとの関連

予測2について検討するために、従属変数として恋人への情緒的サポート依存率を算出し、2(性別：参加者間)×2(内面的性差意識：高/低)の2要因分散分析を行なった。

恋人への情緒的サポート依存率を算出する際、調査参加者が回答した情緒的サポート人数には2～10名とばらつきがあり、恋人への情緒的サポート率に影響することが推測された。しかし、必ずしも情緒的サポート人数が少ないため、恋人への情緒的サポート依存率が高くなるとは限らず、恋人に依存して排他的になり、結果的に情緒的サポート人数が少なくなっているという両側面からの説明が可能であると考えた。そこで、情緒的サポート人数を共変量として扱わず、「恋人、友人、その他の関係から得ているサポート率の合計」を、「恋人、友人、その他(先輩、後輩、先生など)の合計人数」で割った数値を計算し、「1人あたりの情緒的サポート率(家族を除く)」を算出した。そして、その数値を恋人が上回っている程度を「情緒的サポート恋人依存率」とした。家族を除外した理由としては先述したとおりである。

分散分析を実施した結果、内面的性差意識の主効果が有意であった($F(1,64) = 5.09, p < .05$)。下位検定の結果、内面的性差意識高群($M = 15.52$)が、内面的性差意識低群($M = 7.62$)より恋人への情緒的サポート依存率が高かった。つまり、性別に関わらず、内面的性差意識が強い者は内面的性差意識が弱い者と比較して、他の関係より恋人からの情緒的サポートに依存していることが示唆された。したがって、予測2は概ね支持された。

【考 察】

本研究では、性に関するあらゆる情報に注意を向けるよう促し、記憶し、構造化させるジェンダー・スキーマ (Bem, 1981) の持つ機能に着目し、性差観 (ジェンダー・スキーマ) の強い男性は、性差観の強い女性、性差観の弱い男性および女性と比較して、情緒的サポート源が少ないと予測した。特に、Nadler et al. (1984) の先行研究に基づく、同性の情緒的サポート源が少なくなると予測した (予測1)。性差観の強い男性の情緒的サポート源が少ないという結果は認められなかったため、予測1は完全には支持されなかった。しかし、性役割規範意識に基づいて行動しようと動機づけられる性差観の強い男性は、基本的に同性より異性の情緒的サポート源が多くなるが、性役割規範意識に対するこだわりが少ない性差観の低い男性は同性から情緒的サポートを受けることに抵抗がないという傾向は概ね認められる傾向にあり、予測1は一部で支持されたといえよう。

また、恋愛関係にある者は、性別に関わらず、性差観の強い者は性差観の弱い者と比較して、恋愛パートナーに情緒的サポートの多くを依存するという予測2は概ね支持された。結果として、性別に関わらず性差観の強い者は恋愛パートナーに頼りやすいという主効果が認められたが、女性と男性では性差観がソーシャル・サポートの受容に及ぼす影響過程は異なるものであると考える。「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範を意識しやすい性差観の強い女性は、同時に、女性は他者への依存が許される性であると意識しやすいと考えられ、多くの情緒的サポート源を持つことに抵抗がないと推測される。恋愛関係においても、その性役割規範に反することは自己脅威となり得るため、親密な異性である恋愛パートナーからの情緒的サポートに依存する方が適応的であろう。そのため、多くの情緒的サポートを保ちながら、恋愛パートナーからの情緒的サポートに頼る傾向が認められたと考える。一方、性差観の強い男性は「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範に反することは自己脅威となり得るため、基本的に他者から情緒的サポートを受けることに抵抗を感じやすく、情緒的サポート源をあまり持たないと考えられる。しかし、女性は他者をサポートする性であると意識しやすいため、異性からの情緒的サポートであれば、受容することの抵抗感が少ないと考えられる。特に、恋愛関係においては性役割に従って行動する傾向が高くなることが示唆されており (土肥, 1995)、恋愛パートナーからの情緒的サポートが得られやすい状況にあると考えられる。そのため、性差観の強い男性は、情緒的サポート源 (特に、同性) を少なくし、恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受容する傾向が認められたと考える。

本研究で得られた結果は、総じてこのような過程を支持するものであった。この結果は、ソーシャル・サポート源の選択が生物学的な要因というより、性差観という個人差

のある要因によって規定されるという示唆にとどまらず、ソーシャル・サポート源の多様性に関するジェンダー差は社会の性役割規範に由来するものであることを示唆するものであった。最後に、本研究の問題点と今後の展望について述べる。まず、本研究では性差観とソーシャル・サポートとの関連を検討するために、ソーシャル・サポートの受容に着目した。したがって、性差観と実際にソーシャル・サポートを受けている対人関係との関連については新たな示唆が得られたものと考えられる。一方、性差観とソーシャル・サポートの受容の間には、男性と女性で異なる影響過程が存在する可能性も示唆された。今後、このような影響過程を明らかにするためには、Nadler et al. (1984) が測定したように、サポートの希求性やサポート受容への抵抗感を測定する必要があるだろう。次に、これまでの知見を整理すると、Nadler et al. (1984) の知見は質問紙実験で得られたものであり、性別以外の情報が極端に少ない状況における示唆である。また、男性の親密な異性への情緒的サポート依存に関する知見は (Antonucci & Akiyama, 1987)、既婚者を対象とした調査から得られたものであり、性役割分業がなされやすい婚姻関係で得られた知見である。これらの先行研究では、いずれもその結果の背景に性役割が存在することを示唆しており、本研究においてもこれらの知見を支持する方向の結果が得られている。しかし、恋愛関係における恋愛パートナーとの親密さは多様である可能性が高く、性役割に基づくソーシャル・サポート行動には、恋愛パートナーとの親密さという要因が影響を与えていると考えられる。特に、女性は結婚を考えるようなパートナーに対して、性役割に基づいた行動を取りやすくなる (赤澤, 1998) といった結果も得られており、今後は恋愛パートナーとの親密さ (i.g., 交際期間, 恋愛進展度, コミットメント, 熱愛度) という要因を統制したうえで、性差観の影響過程について再検討する必要があると考える。

【引用文献】

- 赤澤淳子 1998 恋愛後期における性別役割行動の研究 今治明德短期大学研究紀要, 22, 47-63.
- Antonucci, T.C., & Akiyama, H. 1987 An examination of sex differences in social support among older men and women, *Sex Roles*, 17, 737-749.
- 東清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究, 62, 270-276.
- Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing source. *Psychological Review*, 88, 354
- Berkman, L. F. & Syme, S. L. 1979 Social networks, host resistance and mortality: A nine-year follow-up study of Alameda County residents. *American Journal of Epidemiology*, 109, 186-204.
- Blazer, D. G. 1982 Social support and mortality in an elderly community population. *American Journal of Epidemiology*, 115, 684-694.
- Buunk, B., & Hupka, R. B. 1987 Cross-cultural differences in the elicitation of sexual jealousy.

- Journal of Sex Research*, 23, 12-22.
- Burda, P. C., Jr., Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources: Variation across sex and sex role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 119-126.
- Butler, T., Giordano, S., & Neren, S. 1985 Gender and sex-role attributions as predictors of utilization and natural support systems during personal stress events. *Sex Roles*, 13, 515-524.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 土肥伊都子 1995 性役割志向性・実行度および愛情・好意度に及ぼす性別とジェンダー・パーソナリティの影響 関西学院大学社会学部紀要, 73, 97-107.
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44, 187-194.
- 福岡欣治 2001 労働者の生活ストレスにおける対人的調整要因の社会心理学的研究—職場内外のソーシャル・サポート・ネットワークと心理的適応— 静岡県立大学短期大学部 浜松校 特別研究報告書 (平成11・12年度), 1-11.
- 福岡欣治・橋本治 1997 ソーシャル・サポート・ネットワークの「広さ」と「深さ」からの指標化の試み—大学生と中年成人を対象として— 同志社心理, 44, 6-23.
- 橋本剛 2005a 対人関係に支えられる 和田実 (編) 男と女の対人心理学 北大路書房 pp.137-158.
- Hays, R. B., Oxley, D. 1986 Social Network Development and Functioning During a Life Transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 305-313.
- House, J. S., Landis, K. R., & Umberson, D. 1988 Social relationships and health. *Science*, 241, 540-545.
- 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性役割選択: 性差観スケール (SGC) 作成の試み 教育心理学研究, 45, 366-404.
- 伊藤裕子 1998 高校生のジェンダーをめぐる意識 教育心理学研究, 46, 247-254.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (ラザラス, R. S., フォルクマン, S. 本明寛・春木豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- Leavy, R.L. 1983 Social support and Psychological disorder: A review. *Journal of Community Psychology*, 11, 3-21.
- Nadler, A., Maler, S., & Friedman, A. 1984 Effects of helpers sex, subjects androgyny and self-evaluation on males and females willingness to seek and receive help. *Sex Roles*, 10, 327-340.
- 野辺政雄 1999 高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて 社会学評論, 50, 375-392.
- 尾見康博 1999 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
- Orlofsky, J. L., & O'Heron, C. A. (1987). Development of a short-form Sex Role Behavior Scale. *Journal of Personality Assessment*, 51, 267-277.
- Ross, C. E., J. Mirowsky, & K. Goldstein. 1990 The Impact of the Family on Health: The

- Decade in Review. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 533-546.
- Seeman, TE., & Syme, SL. 1987 Social networks and coronary artery disease: a comparison of the structure and function of social relations as predictors of disease. *Psychosomatic Medicine*, 49, 341-354.
- 嶋信宏 1991 大学生のソーシャル・サポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 嶋信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに関する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates and antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- 鈴木淳子 1996 男性と女性に期待されるもの—性役割— 宗方比佐子・佐野幸子・金井篤子 (編) 女性が学ぶ心理学 福村出版 pp.138-143.
- Vaux, A. & Harrison, D. 1985 Support network characteristics associated with support satisfaction and perceived support. *American Journal of Community Psychology*, 13, 245-268.
- 和田実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田実 1998 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャル・サポートと精神的健康の関係—性差の検討 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- 山下倫実・坂田桐子 2008 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, 56, 57-71.